

# ホトトギス

五月号



旬日記 汀子

平成十四年五月二日 東海ホトトギス同人会  
風心地よきを囀知つてをり  
奥美濃の余花も盛りの過ぎてみし  
五月三日 東海ホトトギス同人会  
ここに又桂若葉を渡る風  
なほ奥の余花の宿りでありしか  
五月三日 東海ホトトギス俳句大会  
風渡るとき大樺若葉かな  
五月四日 芦屋ホトトギス会  
惜春の心の隅に置く多忙  
突然の客に襟の揃はずに  
五月五日 関西野分会  
庭若葉木々の主張のはじまりし  
視線なき武者人形の威を鑑ふ  
五月五日 下萌旬会  
眼鏡拭き視界ひろがる更衣  
旅衣薄暑も脱いでをりにけり  
水音に近づいて行く薄暑かな  
五月六日 ロイヤル吟行会  
見えてゐる海の色にも立夏かな  
風は初夏広さを歩き来りけり  
五月九日 清交社  
素通りの出来ぬ地下街町薄暑  
活けてみて落着く壺の姫女苑  
活けつも見見る駅の裏道姫女苑  
活け終へて架飛んでをり姫女苑  
五月十日 工業倶楽部  
卯の花や西より雨の移り来し  
軽々と薄暑の旅の荷ごしらへ  
土佐の旅近づきて来し初鯉  
五月十一日 四国ホトトギス同人会  
曇のち晴の若葉の光る土佐  
南国の太陽に夏来てをりし

木々渡る風の音あり若の花  
境内に声みなぎりぬ夏通路  
面影を追ふ境内の葉桜に  
五月十二日 四国ホトトギス俳句大会  
土佐の旅には太陽とサングラス  
茄子苗を売りにて茄子も並べあり  
五月十四日 大阪倶楽部  
明日は雨てふ薔薇園に誘はるる  
行先は薔薇園抜けて来し霞  
今心軽し薔薇園抱き  
思ひつきてふ買物の薔薇を抱き  
五月十四日 綿業倶楽部  
句ふとも句はざるとも花卯木  
触れてゆくほかなき山路花卯木  
袋掛濟みし信濃路ゆく限り  
五月十五日 夏潮旬会  
太陽を一つづつ消し袋掛  
風薫るアメリカみやげ配らるる  
一日で済ますやりにけり袋掛  
若葉雨もう来る筈の人待ちて  
五月十六日 クラブ合同  
雨蛙鳴く間もあらず降り出せり  
水音と風音つなぐ青嵐  
六甲をつなぐ芦屋の青嵐  
動く目があるなりし雨蛙  
五月十八日 北近畿ホトトギス俳句大会前日旬会  
薔薇咲かせ棚田の中のレストラン  
万緑の山万緑の大地より  
鬼よりの目怖き吊橋木の花  
運転の目に残像の桐の花  
五月十九日 北近畿ホトトギス俳句大会  
早々に退散の城若葉雨  
五月二十一日 有恒倶楽部  
殺象の命の軽さを置きそめし  
若楓水面に影を置きそめし  
目こぼしもあり夏葺長けてをり  
殺象と滞在三日東京に

かすかにも夕べ来てをり祭笛  
五月二十一日 無名会  
スピードを落せばあたり姫女苑  
通り抜けゆけば影山女かな  
清流に見えゆるる近道山女かな  
山女焼き山菜摘みて山の宿  
山女焼きくれし峡宿訪ふことに  
その辺に咲いて必ず姫女苑  
五月二十二日 春菜会 舞子ビラ  
大橋も卯月曇に捉はるる  
昨年より元気な彼よ夏めける  
万緑を抜けて展げし海大橋よ  
明るさも五月の海よ大橋よ  
軽暖の出会ひ海見てゐて寡黙  
饒舌も寡黙も出逢ひ夏館  
五月二十三日 春菜会  
邂逅の卯月曇の宿りかな  
寝足りしと聞きしも旅路明易し  
夏潮を跨ぐ大橋夜を覚めて  
七色に灯る大橋明易し  
重ねゆく月日の中の短き夜  
五月二十四日 時雨会  
卯の花を腐すほどなく晴れし午後  
薔薇赤し風もろともに剪りにけり  
風の薔薇雨の薔薇とて三日目に  
雨音に紛れてゆきぬはたがみ  
冷房の効きははじめたる窓閉ざす  
殺象の歩く米櫃留守がちに  
五月二十五日 旬会 講演 在す  
胡瓜苗育て都会に倦まず住む  
仕事の手止めて夏場所野球また  
五月二十六日 野性会  
日を透す若葉に木々の個性見る  
待つときも待たせるときも風若葉  
五月二十八日 美穂女様一周忌伝俳句支部大会  
好奇心失せざる如く夏の蝶

# 赤い薔薇

稲畑汀子

一日中東京のマンションに籠って仕事を済ませた。時計を見ると十一時を少し回った所である。次の日は編集会議があるが、その足で芹屋に帰ることになっていた。

寢室の電話が鳴った。十二時近い。今頃誰だろうと思いつつ受話器を取った。廣太郎の声であることはすぐに分った。

「何なの？」

「たつさんが亡くなったの知ってる？」

「え？」

とつさに誰の事かと目を疑った。

「たつさんて、まさか坂井建さんじゃないでしょうね？」

「そうやねん。今送って来たファックスをそこへ送ったから見ておいて」

晴天の霹靂である。しばらく声が続かなかった。

「何故なの？」

「急性心不全だって」

「うそー」

「ほんまや。十一月二十四日だったんやけど、もう密葬は済んだらしいよ。お別れの会があるらしいけど、その案内がファックスで届

いたので送って置いたから」

造幣局東京支局長の秘書課から電話がかかってきたのは今から十年前になるだろうか。大阪造幣局の桜の通り抜けのお誘いであった。東京支局長坂井建さんという方から直々お誘い頂き、喜んでお受けしたのであった。

実際に建さんに会ったのは桜の通り抜けに誘われてからしばらく経ってからであった。大蔵省の要職にある人というと昔私の娘時代に我が家の毎月の句会に来られていた大阪財務局長だった篠塚しげるさんぐらいしか知らない。実際建さんに会うまではしげるさんの面影と重ねていた。そのしげるさんは東京へ戻られて大蔵省の中で俳句を指導され、建さんも手ほどきを受け、「かすみ句会」のメンバーであったという。

会ってみると現役のばりばりであった建さんは私の想像していたよりも若いので驚いた。端正で優しい面輪は繊細な感性の持主であることを見せ乍ら同時に楽しく明るい雰囲気も見せていた。

東京のマンションの一室でやっている月に一度の時雨会へ来られることになり、いよいよ俳句の仲間としての坂井建さんと気楽な付き合いが始まった。俳句の付き合いはお互いの肩書を外した風雅の交りである。それでも一人一人の為人は自ずと備わったものであり、それを無視して付き合うことも出来ない。自然と俳句にその人が現れるから不思議である。

時雨会で「亡き母の……」という句が回って来たのを書き留めな

がら、この句は誰のだろうと気になった。その作者は建さんであった。

「母は幼い時に亡くしました」

「あら本当なの。じゃあ、私をお母さんと思って頂いても」

「はははは」

冗談のように言っていたが、今思うと私に母上の面影を重ねていたのである。建さんの何か憂愁を含んだ眼差しには幼い頃に亡くなった母上への憧憬があり、淋しい過去があるのだといつか納得するようになっていた。叔母上のご主人が彫刻家として有名な舟越保武であることも知った。

私は熱心に俳句を勉強してどんどん自分の境地を拡げて行こうとする建さんを黙って静かに見ていた。

何時からか私の誕生日には必ず建さんから十本の赤い薔薇の花が贈られて来るようになった。

家族のことは余り話されなかったが、東大に子息が入学した時など嬉しそうに報告して下さった。

時雨会の出欠の葉書に「体調不良につき残念ながら欠席」と書かれてくるようになったのはここ半年くらいのことだっただろうか。それでも八月の時雨会には元気に出席されたのである。

お別れの会の案内状に書かれてある電話をかけると奥さまの弟という方が出られ、今家族は動転しているからと奥さまに代わって話をして下さった。

赤い薔薇の花が届かない私の誕生日が近づいて来た。

廣太郎句帳

廣太郎

平成十四年五月一日 一水会

連休の狭間に上りて夏近し

原稿は早目に上げて夏近し

五月九日 土筆会

五月てふ連休疲れありにけり  
ゆらゆらと烏賊の釣られてをりにけり  
仕事あり句会飲み会あり五月

五月十四日 若水会

フアンファール空に放ちて海芋咲く

紅ほのと鯛の白身でありにけり

白壁の街に海芋はいよよ白

岩陰は鯛の起伏でありにけり

五月十六日 蕉心会

下町はいよよ祭の装ひに

山見えずとも下町の夏めきぬ

川見えて来て下町の薄暑かな

高橋に常盤に若葉抜けてゆく

鳩翔ちて若葉散らせる一とと

週末は卯の花腐しめくとといふ

五月十六日 登高会

新樹より子等駆けて来る駈けて行く

もじずりや悪筆親譲りならず

鯉幟満腹感を風紙問ふ

丸ビルの伸びて皇居の新樹続べ

振花に風の原稿用紙かな

新樹の香整へ雨の上りたる

五月十八、十九日 北近畿ホトギス俳句大会

波紋より目高の数となりにけり

梅雨傘の舞いてゐる太鼓橋

五月二十一日 草木瓜会

若葉雨丹波丹後を貫きて

鯉幟都会の風を近づけし

鯉幟寝床となりは自転せり

鯉幟泳ぎ地球は自転せり

五月二十四日 時雨会

穀象よお前も農耕民族か

蓄敷香るファティマルドの風を載せ

穀象に米減つてゆく減つてゆく

薔薇を剪る君も棘持つ女かな

穀象にササニシキコシヒカリなし

五月二十五日 ホトトギス社句会

城濠の栄枯盛衰通し鴨

五月二十八日 故田畑美穂女に集う会

御料人さん涼しう句碑見てはりまつ

句碑生れて確と美穂女忌業平忌

五月三十、三十一日 蕉心会吟行会

松蟬の鳴き継ぐ時の静寂かな

木道の柳絮の道となりを鳴り

風迷ふことも涼しき樵林

老鶯のホーホケキヨピリピリ

くちなはの消えゆくまでの視線かな

山容を整へつ藤掛かりたる

水芭蕉一花は終の華やりに

鳴くものも咲くものも皆万緑下

学校へ徒歩一時の間時鳥

時鳥帰心忘れてをりにけり

二日間都会忘れし夏行かなり

時鳥武尊を統べらる音色とも

佇めば左右せらる時鳥

山菜をば探せらる時鳥

一幕の声太陽を引き寄せ

松蟬の声太陽を引き寄せ

# 雑詠 汀子選

鼻の身を細くせしとき獲物  
 冬座敷影の大きく来て座せり  
 身を鎧ふ技の一つや懐手  
 冬薔薇に時の流れの止まりけり  
 冬薔薇の数多の蕾抱きながら  
 思ひ出の誘ふ悲しみ冬薔薇  
 湯ざめして電話の訃報聞いてをり  
 冬薔薇若き遺影は微笑めり  
 枯葎踏んで献花の列に入る  
 ただ寒し涙似合はぬ仏なる  
 鼻が鳴く帰らねば帰らねば  
 大年の東京駅にまぎれをり  
 惜みても余りある死や冬の雨  
 俳磚は冷たし彼の句も悼む  
 会へばすぐ雪の深さを訊かれけり  
 石路の黄に庭の明暗ありにけり  
 再発の入院それも十二月  
 心電図吊るし始まる十二月

神奈川 志鳥宏遠  
 同 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同 同  
 同 今井千鶴子  
 新潟 安原 葉  
 同 同  
 群馬 吉村ひさ志  
 同 同

雪を分けつぎのまたぎの小屋めざす  
 ランプの灯もるゝまたぎの小屋の夜  
 八千の鶴の眠りし闇深し  
 星凍てて空一枚となりにけり  
 高原の月なき夜の凍て極む  
 はや獺の喰ふや初夢見たやうな  
 湯気立てゝ心しづまる夜の仕事  
 年の瀬の遅延の詫を先づ電話  
 年の瀬の不景気話ばかり聞き  
 水音のひろがつて野は秋半ば  
 昼も尚松濤園の露しとど  
 語らざるものみな深みゆく秋に  
 吹き荒ぶ風もひと味おでん煮る  
 ばらばらに夕餉の家族おでん煮る  
 おでん屋へ風に背中を押されけり  
 波音は地球の呼吸冬に入る  
 さらさらとわが血流るる朝紅葉  
 黄落を行き天上をゆくごとし  
 一時雨一尼寺を濡らし過ぐ  
 二羽死闘他の寒鴉息ひそめ  
 文士滅び遊女ら滅び街寒し  
 身に入むや巖流島の小さかり  
 壇ノ浦海月の影と武者の影  
 秋潮の速さ合戦幻に

熊本 宮中千秋  
 同 同  
 榎原 稲岡 長  
 同 同  
 福岡 松尾緑富  
 同 同  
 久留米 中村田人  
 同 同  
 秋田 浅利恵子  
 同 同  
 熊本 岩岡中正  
 同 同  
 東村山 村松紅花  
 同 同  
 大阪 佐土井智津子  
 同 同

## 雜詠句評（四月号より）

### 亡き妻の部屋寒月の射すばかり 神戸 牧野耕二

窓から煌煌と差し込む寒月の光。作者は灯りも点けないまま亡き妻の部屋に立ちつくす。まだ妻の息遣いが聞こえそうな部屋に、喪われた時間を手繰る作者であろう。いつもおしどり夫婦として静かに寄り添いながら俳句に親しまれていたが、先ほど作者は令子夫人に先立たれた。その事実を納得するにはまだまだ時間が必要であろう。どんな慰めの言葉も、今はただ空しくとどくばかりであることは、体験したものののみが知る深い傷みである。

だが、作者はその悲しみをこのように俳句に表現するまでになられた事に、ほっとしたものを覚えている。深い悲しみをすべて包み込み、ただ眼前の事実だけを述べながら、寒月の光よ

りも鋭くその心中が伝わってくる。令子夫人のご冥福を心からお祈りするばかりである。（弘子）

長く連れ添った最愛の妻を亡くされた作者の悲しみは如何ばかりであつたろうか。今は妻の居ない妻の部屋には寒月が煌々と射しているばかりである。思い出をたぐりよせるように妻の部屋へ入って過ごす作者の心情が想像される句である。（汀子）

### 今一度大原の紅葉訪ひたしと 福岡 松尾緑富

京都に憧れつつ、今は京都から遠く離れて暮らしている人の述懐であろう。寂光院、来迎院、三千院と名刹が多く、後鳥羽天皇陵があり、探梅に桜狩に紅葉狩に、訪ねるには年中事欠かない大原だが、その人はとりわけ大原の紅葉に心を惹かれている。もし出かけることが出来るなら、あと一度でよいから大原の紅葉が見たいというのである。今一度という切迫した言葉が、その人と大原との並々ならぬ関わりを思わせる。作者に思いを打ち明けていることから、その人の現在置かれている状況が想像出来る。（比奈夫）

京都大原の紅葉は実に美しい。作者は嘗て訪ねた大原の紅葉の頃を忘れられないでいる。今一度訪ねてみたいものと思うのも今なかなかそのような機会を作ることが出来ないからである。心の中で描き温めている印象を大切にしている作者の為人が想像される。（汀子）

# 若水集

## 廣太郎選

乗初・雪晴

竹割つたやうな雪晴なりし空 福岡 古賀伸治  
 雪晴の梢ちりちり焦げる音 同  
 雪晴の仔細さらせる梢かな 同  
 雪晴の丘父遠し母とほし いわき 小松里草  
 雪晴の青空に手を触れてみる 同  
 雪晴の雪もて拭きし空真青 同  
 会ひに行く窓透き通る初電車 香川 内原弘美  
 乗初の大きく避けし水溜り 同  
 乗初やワルツを載せて街を過ぐ 同  
 雪晴の景の全ては曲線に 香川 涌羅由美  
 雪晴に描くシユプールなめらかに 同  
 雪晴にリフト待つ列伸びにけり 同  
 乗初や虚子館へすぐ着いてをり 明石 本郷桂子  
 乗初の帰路となりたる京泊り 同  
 雪晴の風磯の香と合ふ神戸 同  
 窓といふ窓の膨らむ深雪晴 札幌 佐藤恭子  
 深雪晴犬はまつすぐ走れない 同  
 置いてゆく仮想現実深雪晴 同

雪晴やアルプスめきし桜島 鹿児島 青野迦葉  
 雪晴やロケット基地にある未来 同  
 乗初のバスの空気も新しく 同  
 乗初に短く祈り唱へけり 広島 桧高孝子  
 雪晴に甘さ加へて乾きゆく 同  
 日の碎け風の碎けて雪晴るる 同  
 雪晴やまばゆきまでの過去未来 東京 吉田小幸  
 虚子館へ人を案内や初電車 同  
 芦屋とは来慣れて近し初電車 同  
 雪晴や虚子の句碑より見る浅間 狭山 大久保白村  
 雪晴や小諸の虚子の散歩道 同  
 雪晴にして雪雲の生れそむ 同  
 雪晴の叡山呼吸はじめけり 大津 丹後浪月  
 雪晴の空より現るる竹生島 同  
 雪晴と云ふ一枚の大玻璃戸 同  
 雪晴の踏みしだかれし獣道 神戸 千原叡子  
 乗初の婿の車にジャズを聴く 同  
 雪晴の玩具のやうな一両車 同  
 乗初や遠くの客に会釈して 高松 四宮博  
 雪晴や発つ気配なき異国船 同  
 雪晴や一村音を忘れたる 同  
 乗初や心のベルト確としめ 石川 古源和子  
 譲られし座席の温み初電車 同  
 雪晴や点となりゆく鳥の名は 同

# 若水集句評 廣太郎

竹割つたやうな雪晴なりし空 福岡 古賀伸治

雪国でなければなかなか本来季節としての「雪晴」を感じるのは難しいのかも知れないが、凜と澄み切った空の様子が「竹割つたやう」という御馴染みの慣用語を取って使った事で見事に表現されている。

乗初や遠くの客に会釈して 高松 四宮 博

知り合いが乗り合わせていたのだろうか。新年最初に乗物に乗る事は、それだけでうきうきするものだが、遠くに乗り合わせていた知人に気付いた、その二重の喜びがさりげない表現から明るく伝わってくる。

雪晴や点となりゆく鳥の名は 石川 古源和子

ひよっとするとこの鳥も白かったのではないだろうか。飛び立って初めて作者の目に映り、気付いた時にはもう遙か彼方に飛び去っている。広い「雪晴」の景と、鳥の動きとの対比が躍動感溢れる句となった。

乗初や日本列島ちぢまれり 奈良 山口峰玉

新幹線などの発達で、日本国内の移動は甚だ早くなった。毎年正月が来ると「乗初」は誰でも経験する事ではあるが、年々スピードが速くなる交通機関への感動が込められていると同時に、少しそんな事への皮肉も感じてしまう句である。

父の墓背に雪晴の蔵王美し 白石 熊谷敏子

地名からも判るように、名峰蔵王山を指呼に暮らしておられる作者であろう。又、父上もこの地に暮らしておられた事が想像出来るが、樹氷もさることながらこの季節の蔵王の「雪晴」は見事なものである。父への、そして土地への愛情が感じられる。

初電車心の威儀を正しうす 横浜 岩間光景

普段乗り慣れた通勤電車でも「初電車」となると心が引き締まる。作者もそんな心持ちなのだろう。同じ電車でも普段とは違う雰囲気を感じている様子が高貴なまでに伝わってくる。